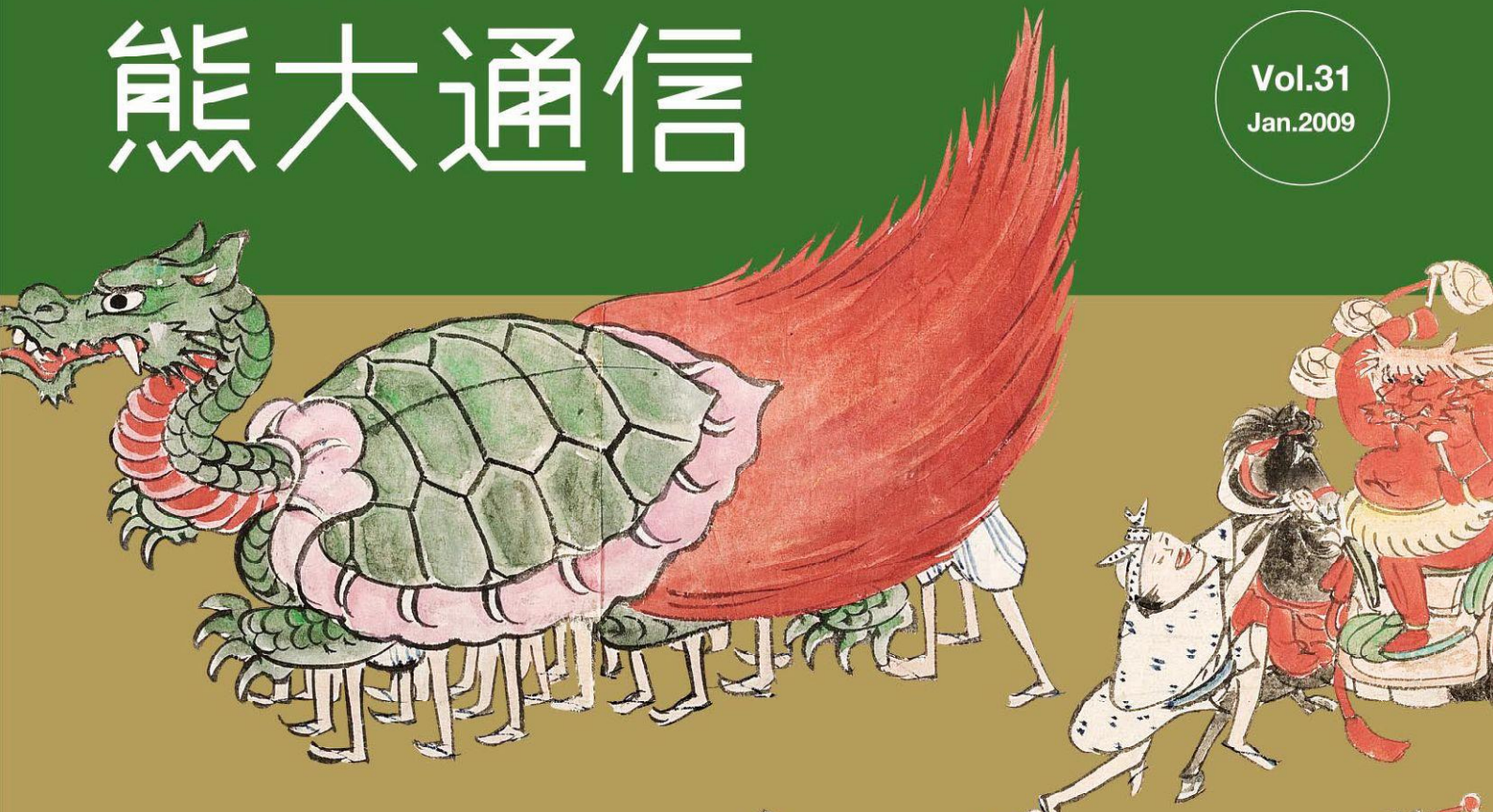
KUMADAI TSUSHIN

熊大通信

Vol.31
Jan.2009



[特集]知と社会 Vol.31

産学連携で進む 健康プロジェクト

5 **地域とともに**
再生するまち、水俣とともに
大学院自然科学研究科「みなまた環境塾」

7 **研究室探訪**
絵画を通し感性を育む
目指すのは喜びと感動の"伝達師"
教育学部　中学校教員養成課程美術学科　絵画ゼミ

9 **国際交流**
東南アジア地域の科学技術発展を担う
「第６回熊本大学フォーラム」インドネシアで開催

11 **卒業生ジャーナル**
㈱東芝　システムLSI事業部　野中絵理子さん
花王㈱　HHCパーソナルヘルス
メンズプロダクツグループ　中嶋釈光さん

13 **くまもと自慢 file.3**
「温泉天国」の熊本

14 **Topics**

15 **INFORMATION**

国立大学法人
熊本大学
Kumamoto University

表紙：五高記念館蔵「肥後村々雨乞行列彩色画」から

植木町健康福祉センターかがやき館で実施されている健康リズム体操。参加者たちは「一人で体操するよりも、みんなでワイワイやるから楽しく続けられる」と継続の秘訣を話している。

[特集]知と社会 Vol.31

産学連携で進む 健康プロジェクト

超高齢化社会を目前に、医療制度や介護保険制度の改革が進み、平成 20 年度にはメタボリックシンドローム（代謝症候群）や生活習慣病の予防を図る特定健診と特定保健指導がスタートした。「健康」に関して、大学が果たすべき役割と期待はますます大きくなっている。今回の特集では、本学がこれまでに積み重ねてきた研究成果を産学連携の取り組みとして社会に還元している「健康プロジェクト」の2つの事例を紹介する。

大学院医学薬学研究部 ＋ 株式会社くまもと健康支援研究所

ヘルスプロモーションを身近に

株式会社くまもと健康支援研究所 **松尾洋** 社長

大学院生が健康支援ベンチャーを起業

平成18年、本学大学院医学教育部博士課程に在籍していた松尾洋さんが健康支援を行うベンチャー企業「株式会社くまもと健康支援研究所」（熊本市）を設立した。大学院で研究した科学的根拠に基づく健康づくり及び介護予防の研究開発を生かしての起業。指導教員だった上田厚教授をはじめ、医学薬学研究部の教員らが支援した。当時、“大学発の健康支援ベンチャー”として話題になった。

大学院医学薬学研究部 **上田厚** 教授

「企業や自治体の健康支援事業をサポートし、その研究や実践を通して、個人のQOL（生活の質）向上に寄与することを目的に起業しました」と言う松尾さん。増え続ける国民医療費の適正化や生活習慣病による早世の防止など、社会貢献につながる事業である。もともと健康教育に関心があり、本学教育学部で学校保健教育を専攻した。卒業後、あるNPO活動に参加して上田教授と出会い、同教授が推進するヘルスプロモーションに感銘を受け、社会人大学院生として、上田研究室で学んだ。

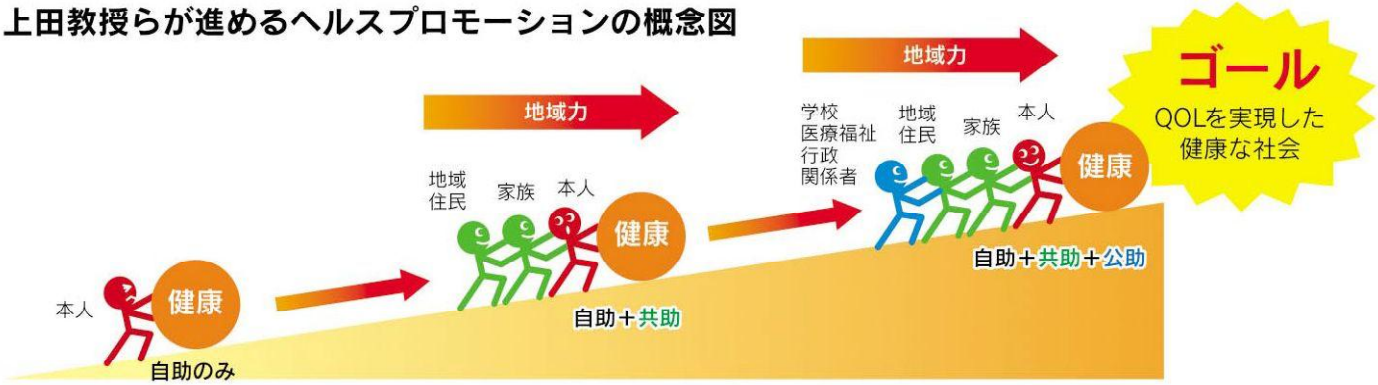
上田教授によると「ヘルスプロモーションとは、人々が自らの健康をコントロールし、改善することができるようにするプロセスのこと」。

QOLを実現するために

上田教授は「健康は人生を豊かにするための“資源”の一つですが、単に病気やケガをしていなければいいというものではありません。例えば、寝たきりのお年寄りにとって、毎日孫の元気な声を聞くことが“健康の証”ということもある。健康について考えるとき、最も重要なことは、人が自分に与えられた人生を受け入れ、その人らしい生き方、QOLを実現できるかどうかです」と語る。病気やケガの治療が必要なのはもちろんだが、日々の暮らしの中でQOLの実現を図ることが“健康づくり”につながる、という考え方だ。

では、どうすれば、QOLを実現する健康づくりができるのか。上田教授は「QOLを実現する健康づくりのためには、本人自身の努力（自助）に、地域（周囲）との助け合い（共助）や学校、医療福祉、行政など（公助）を加えたヘルスプロモーションを地域で構築することが大切」と語る。

上田教授らが進めるヘルスプロモーションの概念図



“健康づくり”に対する本人の努力（自助）に、家族や地域住民の協力（共助）が加わることによって、QOLを実現した「健康社会」へのゴールがより近くなる。さらに学校、医療福祉機関、行政などによる支援（公助）が整うことによって、その効果はますます高まる。

健康づくりで地域を元気に

上田教授は、熊本県内の甲佐町、植木町、本渡市（現天草市）、五和町（同）で、「地域保健（農村医学・都市医学）」の研究に取り組み、地域のヘルスプロモーション構築に貢献してきた。特に、植木町が平成 15 ～ 17 年にかけて厚生労働省のモデル市町村の指定を受けた「国保ヘルスアップ事業」では、健康に問題のある人をピックアップ。一人ひとりのライフスタイル（運動、栄養、休養）を変えて問題解決の方策を探り、地域の健康づくりに大きな成果を上げた。

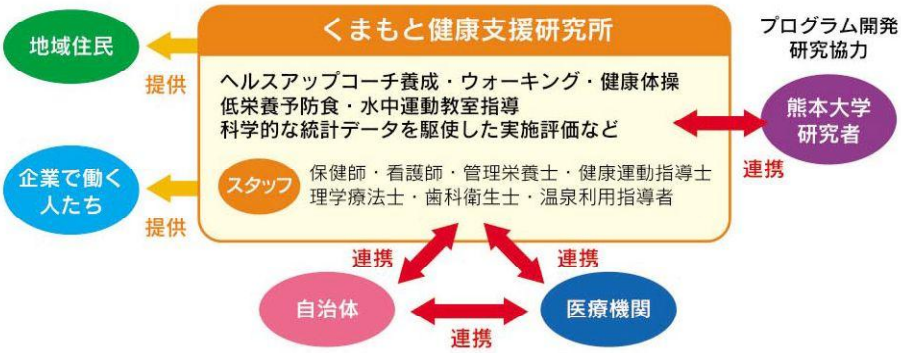
主菜と副菜のバランスを重視した低栄養予防食

「住民の健康づくりが実現されなければ、活性化された地域とは言えない」と上田教授。研究の積み重ねの中で、生活習慣の改善に取り組んだ住民たちがグループワークで感想を話し合ったり、水中運動を体験したりする「参加型・行動志向型健康社会創造プログラム」をつくった。このプログラムの実践を担い、社会貢献につなげているのが、松尾さんのくまもと健康支援研究所だ。

大学の専門的な知識を実践に

「健康のために運動が必要だと分かっていても、それをいざ実行すると難しいし、科学的な根拠をもとに運動を指導できる人材も少ない。大学の専門的な知識を職場や地域で実践することが必要だと考えた」と言う松尾さん。平成 20 年 3 月に大学院博士課程を修了した現在も、上田教授らの指導・技術協力を得ながら、各種の健康支援事業を展開している。

熊本県内の企業や自治体が実施する保健指導や介護予防プログラムの企画や実施評価事業などの受託件数も少しずつ増え、専門的な知識や科学的根拠のあるデータをもとにした、大学発健康産業の一つとして今後のさらなる発展が期待されている。



大学院医学薬学研究部 ＋ つちやゴム株式会社

脱メタボ！に挑む

メタボの有病・予備軍は全国で 2,000 万人

メタボリックシンドローム、いわゆるメタボは、内臓脂肪型肥満に高血糖・高血圧・高脂血症のうち 2 つ以上を合併した状態をいう。メタボ有病者と予備軍を合わせると全国で 2,000 万人を超えるといわれ、日本人の健康を揺るがす大問題となっている。それに伴い、メタボを取り巻く健康・医療産業の市場規模は、数千億円にも及ぶと予測されている。

本学では、大学院医学薬学研究部の甲斐広文教授らを中心に、「メタボ改善」というテーマを掲げ、地場企業つちやゴム株式会社（上益城郡嘉島町、倉田雄平社長）との産学連携によって商品（商品名「バイオメトロノーム」）を開発した。甲斐教授らが担当した基礎研究とつちやゴムが開発した「電磁波シールドゴム素材」とのマッチングによって実用化のめどが付いた。

温熱と微弱電流の相乗効果を確認

商品化の基礎となった研究について、甲斐教授は「温熱効果と微弱電流との相乗効果によって、糖尿病などメタボの要因となるさまざまな疾患の改善に期待が持てることを実証した。微弱電流を加えるだけでも糖尿病の改善に直接効果があるが、さらに温熱効果で熱ショック蛋白質が増え、それ

大学院医学薬学研究部 **甲斐広文** 教授

マウスを使ったバイオメトロノーム装着実験の結果

病態の改善	微弱電流	温熱	併用
空腹時血糖値の低下	○	◎	◎
インスリン高値の低下	△	○	◎
アディポネクチンの増加	○	○	◎
耐糖能の改善	△	○	◎
インスリン抵抗性の改善	◎	△	◎
膵機能の改善	△	○	◎
内臓脂肪の減少	○	○	◎
皮下脂肪の減少	○	△	◎

◎：顕著に改善　○：改善　△：変化なし

試行錯誤の末に開発した実験装置は、即席漬けのプラスチック容器の上下に電磁波シールドゴムを貼って手づくりしたもの。毎日コツコツと観察する地道な努力が、微弱電流と温熱の併用による血糖値の低下や内臓脂肪減少などの効果を明らかにした。

つちやゴム株式会社 **倉田雄平** 社長

によって時間差による改善効果が見られる。併用することで改善効果はさらに持続性が高まる。最終的には、糖尿病対策としてインスリンの効果を高めることを手助けすることができる」と言う。甲斐教授らの研究成果は、国際誌に掲載が決まり、メタボ改善に大きな道筋をつけるものとなった。

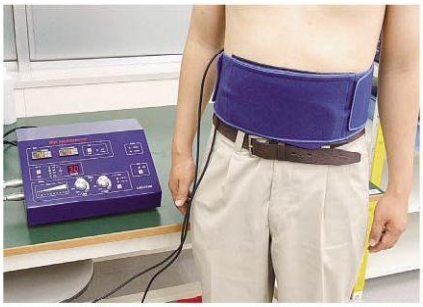
この研究成果は、本学医学部附属病院代謝・内分泌内科の荒木栄一教授、近藤龍也博士との共同研究により、大学院薬学教育部博士後期課程 3 年の森野沙緒里さんが手がけた、マウスを使った実験によって確認された。実験では「電磁波シールドゴム素材」を装着した容器にメタボ状態のマウスを入れ、微弱電流の効果を測定。貴重な実験結果を得ることができ、結果的には本学大学院生のレベルの高さも証明した。今後はさらに、価格や使い勝手など、よりマーケットに適応した商品化に向け、新たな段階へとステップアップを目指している。

企業の熱意と研究者の理解

産学連携のきっかけとなったのは、甲斐教授の研究（熱ショック蛋白質とガン温熱療法に関する研究開発）の新聞記事。たまたまこの記事を目にした倉田社長が「ぜひ甲斐先生にお会いしたいと熱望していたら、その２カ月後に熊本大学との懇親会に呼ばれる機会があり、お会いすることができた」。まさに運命的な出会いだった。

同社が開発したゴム素材は、微弱電流と温熱を同時に伝えることができる。甲斐教授の研究成果との密接な関連を持ち得る素材だった。倉田社長は「ゴム素材としてのマーケットはあったが、お客さまの顔が見える商品として実用化したいと思っていた」と言う。甲斐教授との出会いで、倉田社長の願いが実現することになる。

現在は、荒木教授らが、熊本赤十字病院健康管理センターの協力を得て、モニターによる臨床試験に着手している。対象者は特定健診（メタボ健診）で、メタボ状態と診断された 40 ～ 60 歳の男性 80 名。実際に「バイオメトロノーム」を腹部に着用して、微弱電流と温熱による改善効果を測定している。今後は、臨床試験の結果とともに、モニターからの意見などを取り入れ、マーケットに対応した軽量化・低価格化・簡素化への取り組みを進めていくことになる。



バイオメトロノームの装着例。内臓脂肪の減少や血糖値の低下など、メタボの解消が期待される。

産学連携について、甲斐教授は「実用化がうまくいったのは、企業側に熱意と能力を持った経営者がいたことが大きい。一方、研究者側には企業活動に対する理解が必要だ。コミュニケーションのチャンネルを企業側に合わせることが、研究者側に求められている」。倉田社長は「一企業でエビデンス（科学的根拠）を出すのは難しいが、甲斐先生たちのおかげで科学的なデータを集めることができ、信用力が高まった。また、国際展開を考えるとき、我々のような地場企業は商社やジェトロ（日本貿易振興機構）の活用ぐらいしか思いつかないが、大学は国際交流が活発で、甲斐先生のパソコンの中から世界が見えた。世界を見据えながら、何度も行き来してきめ細かな打ち合わせができるのは地元大学との連携だからこそ」と本学との産学連携のメリットを語っている。

産学連携による商品化によって、「健康」という巨大マッケートの中に見えてきた新しいビジネスモデルの可能性。大学の知は、健康分野においても着実に生かされている。

地域とともに

再生するまち、水俣とともに
大学院自然科学研究科「みなまた環境塾」

地域再生の願いを込めて水俣湾埋立地に誕生した「エコパーク水俣」の全景。水俣病資料館や環境センターのほか、親水緑地、運動施設、心のケアを行う園芸作業施設などがあり、市民から環境学習に訪れる修学旅行生まで、多くの人が利用しています。

公害を乗り越え、地域再生に取り組んでいる水俣市。本学は平成19年度から同市と協働して、市民や企業、行政関係者を対象にした「みなまた環境塾」を開いています。水俣から世界へ、環境の大切さを発信できる人材の育成が目的です。今春、第1期の修了生を送り出す「みなまた環境塾」の取り組みを紹介します。

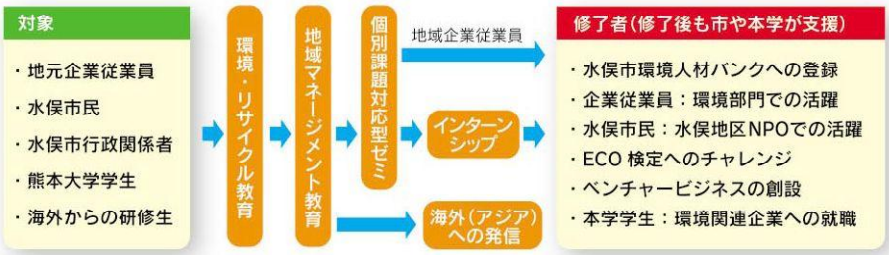
現地での授業に意味がある

みなまた環境塾は、平成19年度科学技術振興調整費（地域再生人材創出拠点の形成プログラム）に「みなまた環境マイスター養成プログラム」が採択されたことを受けて、同年10月に大学院自然科学研究科でスタートしました。養成期間は1年半。現在は第1期生23人が受講中です。

この塾が大学の一般的な公開講座と異なるのは、現地、水俣市で開講していることです。このため、同市の森近（ちかし）副市長は「先生方が水俣に通ってくださることがありがたいですね。水俣市民が熊本市内の大学まで通うのは負担が大きいですから」と語る。

他方、現地での開催は大学にとっても大きな意味があります。塾長を務めている石原修大学院自然科学研究科教授は「水俣では、水俣病の原因となった環境破壊を乗り越えて、市民と行政が一丸となって地域再生に取り組んでいる。また、源流から河口までの河川の流れに沿って、工業地帯を含む地域経済モデルや過疎化、少子高齢化に悩む中山間地域モデルなど、すべての地域課題が集約され

みなまた環境マイスター養成プログラム



ている。環境問題や環境問題をベースにした地域づくりを学び研究を進める上で、最適のフィールドです」と話しています。

最先端を学ぶ“塾”

塾では、環境・リサイクル学や地域マネージメント学などの環境問題をベースに、中山間地域の活性化やヘルスプロモーション（本誌 P2 を参照）などの多彩な内容をテーマにした講義やゼミ、体験学習を行っています。塾生の一人として参加している水俣市議会議員の西田弘志さんは「大学で研究されている最先端の知識を学ぶと、環境問題が今どこに向かっているかがよく分かります。水俣市の今後の方向性を見出すことにもつながると思います」

講義やゼミは主に水俣市で開きますが、専門的な実験や分析は、本学の研究室で行います。例えば、大学院自然科学研究科の河原正泰教授は、廃家電に含まれるレアメタル（希少金属）を調べる実験を指導しています。実験に参加した水俣市のリサイクル会社の田上博貴さんや西川裕矢さんは「専門的な設備を使って勉強したことを仕事に生かしたい」と真剣な表情でメモをとっていました。

期待を担う第1期生

「水俣病を経験した地域だからこそ、環境にこだわろう」とさまざまな環境問題に取り組む水俣市。

平成 4 年に「環境モデル都市づくり」を宣言し、同 11 年に「環境マネジメントシステムの仕様」を定めた ISO14001 を認証取得。同 17 年には「環境首都コンテスト」で総合 1 位となり、昨年は国の「環境モデル都市」に認定されました。

太陽・風力などの自然エネルギーの導入やバイオマスエネルギーの創出、レアメタルの回収、安全安心な農産物づくり、海藻の森づくり、エコハウス集落づくりなど多方面で持続可能な地域づくりを行い、2050年までに温室効果ガスの排出半減を目指しています。中でも最も進んでいるのが、「ごみゼロ」への取り組みで、同市の現在のごみ分別は何と 22 種類。

石原教授（左）と森副市長。

リサイクル率も 40%まで高まっています。

「今、生きている人が加害者になる。被害者は子どもや孫たち。それが環境破壊です」と語る石原教授。森副市長は「環境破壊は人命や健康を奪うだけでなく、地域コミュニティーまで崩壊させます。環境保全の大切さを世界に向けて発信するのが水俣の役割だと思います。みなまた環境塾で学んだ皆さんには、地域づくりのリーダーとして、また次世代に環境の大切さを伝える発信者として活躍して欲しい」と期待を寄せています。第 1 期生の久木田伸子さんが「水俣市環境モデル都市推進委員会」の委員に任命されるなど、塾の成果は着々と表れています。

河原教授（写真中央）とともに、蛍光 X 線分析装置を使ってレアメタルの分析結果に見入る塾生たち。

中山間地の活性化について考える講義。

海藻の標本づくりの実習。

みなまた環境塾の第２期生（平成21年４月開講）を募集中です。
詳しくは http://ecomot.org をご覧ください。

研究室探訪

絵画ゼミは、教育学部４階の「第２絵画室」で創作しています。

教育学部　中学校教員養成課程美術学科　絵画ゼミ

絵画を通し感性を育む。目指すのは喜びと感動の“伝達師”

「作品自体で多くの人を魅せることが美術の素晴らしさ。それを体感した上で、子どもたちに感動や感銘を伝える人材に育って欲しい」と言う松永准教授。ここは、人類が数千年の長い年月をかけて培ってきた“美術の真髄”に触れ、それを次世代に伝える“美の伝達師”を養成する場です。

松永 拓己
教育学部准教授

“美術の真髄”に触れ、技量を磨く

「第２絵画室」と書かれた扉を開けると、まずは立ち並ぶキャンバスと絵の具の匂いに圧倒されます。学部３・４年生６人、大学院生４人の計10人が、天井に届きそうなほど大きなキャンバスと向き合い、日夜絵筆を走らせています。

「学生たちには広い教養と視野を持った心豊かな人間として、未来の教育者になってもらわなくてはなりません。しかも、美術教員はほとんどの学校で一人しかいませんから、いざ教壇に立ったときに一人でも困らないように、大学で美術に関するあらゆる知識と技術を身に付けるよう指導しています」と言う松永准教授。自身が専門とする油彩のほか、小・中学校で教える水彩や版画から、本格的なテンペラ画（石膏を地塗りしたボードに特別な絵の具で色づけする技法）まで、幅広く教えています。

松永准教授が大切にしているのは、そうした技法の伝授だけではありません。

「“美術の真髄”に触れてこそ、個々が現場で信念を持って美術を語れるようになるんです」。いろいろなものを見て、脳や感覚を刺激し、手を通して表現する。「絵画とは立体である３次元の世界を、キャンバスという２次元の平面世界に再現する魔法のような作業」と松永准教授。学生たちは絵画の基本であるデッサンや色彩論を踏まえて技術を磨いた後、油絵や水彩、版画などさまざまな技法を使って、自己の内面イメージの表現を追究していきます。

美術を通し、すべての事象と真摯に向き合う人材に

松永准教授は「絵画は上手、下手だけで片付けられるものではありません。大作ともなると時間がかかり、途中で挫けそうになる。でも安易な表現や妥協をしない姿勢こそが、自身が教師になったときに美術以外の面でも必要」だと言います。「今の学生は打たれ弱い一面もあるので、あまり厳しい批評はしませんが…。ただ、もう少しで壁が破れるのにと思う時には、背中を押してあげます。お互いに励まし合って切磋琢磨して欲しい」

押し付けではなく、個性を重視し、粘り強く物事に取り組む人材育成が絵画ゼミの特徴です。

創造の神のほほ笑みを信じて

シャボン玉や花、自画像など各々が表現のテーマを決め、制作に取り組む絵画ゼミの学生たち。「一つのテーマを 20 ～ 30 年と描き続けるうちに、その人の中でテーマ自体が熟成し面白い表現ができる」と言う松永准教授も蜂を表現のモチーフとして描き続けています。

「自分がキャンバスの中に作った物語を、多くの人に見てもらえるから絵画は楽しい。松永先生から学んだのは絵に対する姿勢や考え方」とゼミの様子を教えてくれた大学院 2 年の渡邉満さん。馬をモチーフにした作品で「青木繁展」に入選、「柳川市総合美術展」で大賞を受賞するなど活躍しています。またトラをモチーフに描く大学院 1 年の山下浩司さんは「発色の良さと艶に惹かれたテンペラ画の美しさを伝えたい。でも、どこまで描けば良いのかと葛藤する毎日です」と作品と向き合う心境を語ってくれました。

「絵画に設計図はありません。常に考えながら創造していくものです。でも、芸術と真摯に向き合っていくと、描いている最中に右手に神様が降りてくるような奇跡や魔法に出合うことができる。それをみんなにも感じて欲しい」と松永准教授。創造の神がほほ笑む時を信じて修練の日々が続きます。

馬や豚をモチーフにして表現している大学院 2 年の渡邉さん。見る人によって、多くの物語が生まれそうです。

トラをモチーフにしたテンペラ画を描いている大学院 1 年の山下さん。テンペラの魅力は「絵の具が乾くのが早く、発色が良いこと」だそうです。

絵画ゼミの卒業制作は 100 号以上の作品が必須。そろそろ追い込みに入った 4 年生の尾崎優さん（上）は百合の油彩画を、自画像にこだわってきた横山香寿美さん（下）は水彩画の大作に挑んでいました。

「過去の技法を再現することで、当時の芸術家たちと同じ体験ができる」と松永准教授。

国際交流

東南アジア地域の科学技術発展を担う
「第6回熊本大学フォーラム」インドネシアで開催

日本・インドネシア友好年の2008年、インドネシアとの交流発展を目指して「第6回熊本大学フォーラム」を11月5･6日の2日間、インドネシア第2の都市・スラバヤで開催しました。

数々の成果発表に大きな期待

熊本大学は平成18年度から、スラバヤ工科大学を拠点に、情報通信技術（ICT）を活用した人材育成プロジェクトを展開しています。国際協力機構（JICA）の事業で初めて、大学単独の事業として委託されたもので、日本の教育研究システムを伝授しながら、ICT分野で14の研究を進めています。

フォーラム初日は基調講演の後、会場のスラバヤ工科大学とインドネシア東部の島に点在する4大学の研究所を中継で結び、プロジェクトリーダーである本学大学院自然科学研究科の宇佐川毅教授を座長にしたテレビ会議を開き、これまでの成果を発表。午後からはヤングリサーチャーセッションで、本学と同工科大学両校の学生11名の口頭発表と30名のポスター発表が行われ、両国の研究者や学生が世界の科学技術をリードしていくことを実感できる一日となりました。

テレビ会議システムで行ったJICAプロジェクトの成果発表（11月5日、スラバヤ工科大学）。

両国関係を支える人材育成を目指して

日本とインドネシアの両国関係の深まりと研究推進に期待が高まる中、2日目は在スラバヤ日本国総領事館の大床泰司総領事とインドネシアのモハマド・ヌー情報通信大臣（同工科大学前学長）の祝辞で開会しました。

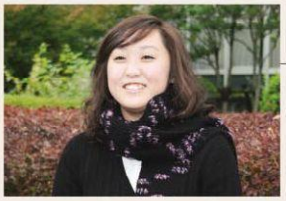
本学は、平成19年にスラバヤ工科大学と大学間交流協定を締結しています。今回のフォーラムを機に、同工科大学にチャンドラワシ、マタラム、ヌサ・センダナ、サム・ラトランギ大学の4大学が加わった東部インドネシア地域の5大学連合との間で学術・学生交流協定を結ぶことになり、﨑元達郎学長と5大学の学長・副学長による調印式が行われました。

今回のフォーラムには、過去最多の約500名が参加。本学とインドネシアの教育・研究交流による科学技術の発展に一層の期待が寄せられた2日間となりました。フォーラム実行委員長の阪口薫雄副学長は「インドネシアと本学の研究者交流がJICAプロジェクトにおける連携を生み、さらには5大学との交流協定に発展しました。熊本から約50名の訪問団がインドネシアを訪れ、相互理解がより深まり、将来のインドネシアと日本の関係を支える人材育成にもつながると思います」とフォーラム成功の手ごたえを話しています。

フォーラム開催を機に、東部インドネシア地域の5大学連合と学術・学生交流協定を締結。

留学生インタビュー

留学生交流室で友人たちとくつろぐハンさん（写真一番右）。愉快な仲間が多く、笑い声が絶えません。



ハン・ソンユン

韓国・東亜大学日本語日文学科3年生。
2008年10月から1年間の予定で、本学文学部に留学中。

将来は、日本人に韓国語を教える仕事に

高校生の頃、日本のアイドルグループ「SMAP」が好きになり、日本と日本語に興味を持ちました。東亜大学で日本語を学ぶうち、「自分の日本語の実力を試してみたい」「一度日本で暮らしてみたい」という気持ちが強くなり、交流協定校である本学への留学を希望しました。釜山と近いこともあって、両親も「いいよ、行っておいで」と快く送り出してくれました。

本学には現在、私を含めて7人の東亜大学生のほか、多くの韓国人留学生がいるので、寂しさを感じるようなことはありません。特に、東亜大学で同級生のユ・ミンジンさんが一緒なので心強いです。留学してすぐの11月初め、大学の「熊粋祭」にみんなで参加。韓国料理の「チヂミ」や「トッポギ」を作って販売しました。楽しかったです。

「日本語学概論」など、専門の勉強が難しいと思うことはありますが、チューターさんや日本人の友人たちが手助けしてくれるので大丈夫です。ただ、最近の世界的な金融危機で、特にウォンが安くなり困っています。昨年、旅行で日本を訪れたときに比べて、物価が2倍以上に高いと感じられます。お昼は自分で弁当を作り、節約に努めています。将来は、日本人に韓国語を教える仕事に就けたらいいなと考えています。

国際交流 Report　平成20年9月～11月

9月6日／日本留学フェア（韓国・釜山及びソウル）に参加

8日／法学部、中国・中国人民大学と部局間学術交流協定を新規締結。9日には、山崎法学部長ら、上海市の華東政法大学、復旦大学及び同法科大学院を表敬訪問

9日／韓国科学技術院（KAIST）内にリエゾンオフィスを開所、第1回共同シンポジウムを開催

11日／工学部及び自然科学研究科、中国・吉林化工学院と交流協定締結。12日の吉林化工学院創立50周年の式典に参加

17日／カナダ・アルバータ大学 Shah 教授に本学初の名誉博士号（第1号）授与

30年にわたり本学との交流発展に貢献されました。

21日／法学部及び政策創造研究教育センター、中国・復旦大学と「中国地方政府若手公務員の日本短期研修プログラム2008」を開催（27日まで）

復旦大学大学院社会人学生13名を受け入れ、日本の地方自治体における公共管理とサービスの理念等について研修しました。

24日／中国河北省の大学管理運営幹部30名が本学を訪問

日中政府間事業「中国の大学管理運営幹部特別研修」の一環で、国立大学法人化と本学の取組について講義を行いました。

29日／大学院 GP「IT時代の教育イノベーター育成プログラム」熊本大学国際教育セミナーを開催

英・キングストン大学 Middlehurst 教授による高等教育プログラムに関する講演に学内外から30名が参加しました。

10月20日／日本フルブライトメモリアル基金事業により、米・小中高校教育者16名が来学、本学教育学部教員と交流

21日／第4回環黄海産学官連携大学総（学）長フォーラムに参加

韓国・仁川で開催され、日中韓30大学の学長が参加。本学は日本側13大学の事務局大学を務めています。

21日／中国・西南政法大学、法学部及び法曹養成研究科を表敬訪問

25日／留学フェア（中国・上海）に参加（26日まで）

27日／英・ノッティンガム大学副学長補佐来学

28日／仏・ボルドー第3大学副学長来学

28日／インドネシア・サムラトランギ大学学長一行来学

29日／法学部、独・フライブルク大学名誉教授 Reiner Wahl 氏を招き「1950年代のドイツ公法学の創成期」をテーマに講演会を開催、約30名が参加

11月2日／熊本大学日中教育交流訪問団が中国を訪問（9日まで）

教育学部9学科・課程の学生・院生ら39名（団長・仲田陽一教授）が中国・広西壮族自治区の学校を訪ね、中国の教育について見聞し交流を深めました。（今年で6回目）

5日／第6回熊本大学フォーラムをインドネシアで開催（6日まで）

7日／法学部長、法学部留学生との親睦会を開催

10日／熊本大学工学部―中国・山東大学工学系学院－韓国・亜州大学ワークショップを中国・山東大学で開催（11日まで）

自然科学研究科工学系教員18名が参加し意見交換を行いました。

17日／熊本大学グローバル COE「細胞系譜制御研究の国際的人材育成ユニット」、エジプトでシンポジウム開催（19日まで）

54名が発表し、地元参加者らと活発な議論を行いました。同行した崎元学長、阪口副学長らがエジプト教育大臣と会見、ファユム大学及びスエズ運河大学表敬を行いました。

22日／留学生と日本人学生チューターのバレーボール大会を実施

留学生8名を含む15名が参加し、留学生チームと日本人学生チームがスポーツを通じて交流を深めました。

27日／KAIST 副院長及びバイオメディカル研究センター長来学

担当した製品が世界を駆ける

㈱東芝
システムLSI事業部

野中（のなか） 絵理子（えりこ）さん
（平成17年度　工学部卒業）

メーカーゆえの「ものづくり」の喜び

現在は半導体 AV 関係の企画・マーケティング、開発、お客様への製品紹介、技術サポートなどを担当しています。技術部の所属ですが、お客様のところへ直接ご要望をうかがいに行ったり、開発スケジュールを調整したりもしています。

今春、入社して初めて、私が担当する半導体を採用したポータブルオーディオが発売されました。開発の過程では、幾度か問題が発生。夜遅くまで会議を行い、課題を一つひとつ解決していきました。苦労した分、製品が商品化され世界中で使われることに大きな達成感を感じています。これが、メーカーならではの「ものづくり」の喜びですね。

大学は刺激し合う仲間と出会う場

私は久留米工業高等専門学校を卒業後、熊本大学工学部３年に編入しました。編入を決めた理由のうち決定打となったのは、熊大工学部の研究レベルの高さです。実際にキャンパスを訪れると、大学周辺の豊かな自然や大学施設など、勉強や研究、生活もしやすい環境だと感じました。

工学部はレポート提出が多く、友人たちとよく勉強合宿をしました。教育にも興味があったので、教育学部の授業を受講して教員資格も取得。アルバイトやボランティア活動にも精を出し、充実した大学生活でした。

今の私を支えてくれているのは、そんな大学時代に出会った友人たちです。これからも大事な存在であり続けるでしょう。大学は、お互いを刺激し、支え合う人と出会える貴重な場です。

「OB・OG 交流会」（平成 20年7月2日）で、仕事の説明をする野中さん。

卒業生ジャーナル ・・・・・・・・・・・ Shakou NAKASHIMA

大学は社会に出るための“実験室”

花王㈱
HHC パーソナルヘルス
メンズプロダクツグループ

なかしま しゃこう
中嶋 釈光 さん
（平成18年度　大学院文学研究科修了）

大学を“面白くする”活動に参加

教師になりたいと思っていたので教育学部に入学しました。研究の傍ら、学生用のポータルサイトを作ったり、大学の新しいロゴマークを作る活動に参加。とにかく、“大学を面白くしたい”という気持ちが強かったことを覚えています。

そんな中で、教師よりも一般企業で働くことに魅力を感じるようになったのですが、就職活動は失敗の連続。そんな折、大学院文学研究科でコミュニケーションを中心とした研究ができると聞いて、大学院進学を決めました。あまり研究に没頭したわけではないのですが、先生方にはとてもかわいがっていただきました。

CM やパッケージを通して消費者とコミュニケーション

現在は男性用化粧品のマーケティングを担当。商品パッケージや CM などを通して、消費者ときちんとコミュニケーションができているかということを常に意識しています。パッケージやCMを通してさまざまな切り口で“提案”、消費者に“気付き”を促したり“共感”を得なければなりません。店頭で愛着のある担当商品が売れているのを見ると、メーカーと消費者とのコミュニケーションがうまく機能していると実感できうれしくなります。

そんなコミュニケーションの力について学んだ大学生活は、自分にとって社会人になるための“実験室”でした。実験なら失敗しても許されます。社会人になったら失敗は許されません。学生時代は何事も恐れずにチャレンジし、失敗を繰り返して成長してください。

広告研究会で活躍していた学生時代の中嶋さん（写真中央）。

くまもと自慢
file.3

「温泉天国」の熊本

温泉は人間が本来持っている自然治癒力を高める効果があるといわれています。熊本県内には約1400の源泉があり、120カ所を超える温泉地があります。北風が身にしむこの季節、熊本の温泉で身体を温め、ストレス解消をしませんか。

海にも山にも温泉あり

熊本県内の主な温泉地を挙げると、杖立、黒川、菊池、玉名、山鹿、阿蘇、日奈久、湯の児、人吉、下田…と、ほぼ県内全域にわたり、山間地にも海辺にも温泉があることが分かります。源泉数や湧出量では隣県の大分県には及びませんが、熊本が「温泉天国」と呼ばれているのもうなずけます。

深山幽谷の山の温泉では、樹木が発するフィトンチッドを浴びる森林浴と温泉入浴のダブル効果を期待して、海辺の温泉では、東シナ海に沈む夕日の絶景を眺めながら、温泉入浴を楽しむことができます。

健康にも美容にもいい温泉の効用

「湯治」の言葉があるように、温泉の効用は昔から多くの人に利用されてきました。本学の前身・旧制第五高等学校に赴任した夏目漱石も、阿蘇や小天の温泉を訪れて心身をリフレッシュし、名作「二百十日」や「草枕」を著しました。

現代では、血行促進による疲労回復や水圧によるむくみとりなどの効用が科学的にも認められ、温泉人気はますます高まっています。全国的に人気の高い黒川温泉のほか、熊本では「美人の湯」として知られる山鹿温泉、由来が温泉名になっている白鷺温泉(下田温泉)や杖立温泉などがあります。

健康にも美容にも役立つ温泉。「温泉天国」熊本で、「温泉三昧」を満喫しましょう。

Topics

伝統の灯を守り、45回目の「遠歩」達成！

毎年11月1日、阿蘇から本学まで歩く、「阿蘇耐久遠歩大会」。45回目を迎えた昨年は、実行委員になる学生が集まらず、開催が危ぶまれましたが、体育会が実行委員になり、実施することができました。

平成20年10月31日午後9時、本学の大学教育機能開発総合研究センター前に集まった学生や職員などの参加者は、566人。少し緊張気味の表情ながら、元気良くバスに分乗し、阿蘇のスタート地点に向かいました。

日付が変わった11月1日午前零時、男子は阿蘇山上から本学までの約57㎞、女子は阿蘇市のJR市ノ川駅から本学までの約35㎞のコースを歩き始めました。暖冬とはいえ、深夜の阿蘇はさすがに冷えましたが、歩くほどに身体が温まり、みんなでワイワイと楽しい行軍が続きました。

しかし、10㎞、20㎞と距離が進むに連れて、参加者たちの疲労と眠気はしだいにピークに。それでも、みんなで励まし合い、518人が無事にゴール。歩き通した達成感と充足感に包まれながら、実行委員会が用意した温かいぜんざいを美味しそうに食べていました。

実行委員会を引き受けた体育会の吉田幹生委員長（法学部4年）は「44年も続いた伝統行事をなくしてはいけないと、毎年11月に体育会で行ってきた学生の交流パーティーを止めて準備をしました」と、大会の成功に安堵の表情。参加した学生たちからは「日頃歩き慣れていないので、きつかった。でも、学生時代のいい思い出になりました」という感想が聞かれました。

個人の部は、男性が井上智文さん（タイム4時間59分）、女性が野村みやさん（同3時間16分）が優勝。団体の部は、男性がTEAM先端長（平均タイム7時間51分）、女性がチーム☆失礼（同3時間16分）が優勝しました。

大学教育機能開発総合研究センター前に集合した参加者のみなさん。

阿蘇山上をスタートする男子学生たち。

暗い夜道もみんなで歩けば楽しい!? まだまだ元気な歩きぶりですが…？

チェックポイントで確認印をもらう女子学生。

ゴールでは、実行委員会が用意した温かいぜんざいが参加者にふるまわれました。

「熊本大学東京連合同窓会」設立記念式典と交流会を開催

関東地区に在住する本学同窓生の連携を促進し、同窓会活動の充実と同窓生相互の親交を深め、本学発展に寄与することを目的として、「熊本大学東京連合同窓会」が設立されました。これを記念して平成20年11月29日、千代田区一ツ橋の如水会館で、﨑元達郎学長、中島最吉同窓会連合会会長、江口工東京連合同窓会会長をはじめ、関東地区在住の卒業生や大学関係者など約90名が出席して、設立記念式典等が開催されました。

挨拶する江口会長

式典後の記念講演会では、﨑元学長が「熊本大学の法人化と将来」と題して、法人化後の本学の現状や取り組みなどを中心に講演。引き続き行われた交流会では、卒業生を代表して前田勝之助東レ株式会社名誉会長（元総合科学技術会議議員）の挨拶の後、園田頼和支援者会会長による乾杯の発声で開宴。学生時代の思い出話などに花を咲かせ、旧交を温めながら終始和やかな雰囲気で進みました。

出席者全員で寮歌を熱唱

最後に、本学同窓生らに歌い継がれてきた『五高寮歌』の前置きである“巻頭言”を、昭和52年工学部卒業生の井誠輔氏が朗々と放歌すると、交流会は大いに盛り上がり、出席者全員が肩を組んで寮歌を熱唱して大盛況の内に閉会しました。出席者からは「大学と同窓生との交流や連携を図るために、今後も定期的に開催して欲しい」という声が多く聞かれました。

馬術部の田上綾子さん（教育学部3年）が全国大会に出場

本学馬術部は、戦前からの伝統を誇り、旧制第五高等学校時代には劇作家の故・木下順二氏が主将を務めたり、オリンピック選手を輩出したこともある部ですが、近年は部員数（現役部員は2名）が減少し、活動も縮小傾向にありました。そんな中、教育学部3年の田上綾子さんが、平成20年10月19日に宮崎県綾馬事公苑で開かれた「九州学生馬術選手権大会」で見事優勝。12月6・7日、東京・JRA馬事公苑で開かれた「全日本学生馬術女子選手権大会」に出場、関東在住の馬術部OBたちの声援を受けて健闘しました。残念ながら入賞はできませんでしたが、田上さんは「馬と一体となって走る馬術の楽しさを多くの人に知って欲しいです」と話していました。

全国大会出場を果たした田上綾子さん

実社会での就労と生活を目指して

特別支援学校生徒の職場体験・現場実習先を探しています。

福祉施設で実習する特別支援学校の生徒

本学教育学部附属特別支援学校高等部は、企業や福祉施設での就労体験を通して、生徒たちが実社会での労働や生活について学び、卒業後の社会生活への適応性を高める職場体験や現場実習を実施しています。

特に、2年次後期と3年次に行う現場実習は、生徒たちが日々の学習で培ってきた“働く力”を実際の職場で試し、現在の自分の力を知る大切な機会であり、なかでも3年次の現場実習は、具体的な進路選択と課題解決につながる場としても重要です。実社会への適応を目指す生徒たちの体験や実習の受け入れ先を募集しています。皆様のご理解とご協力をお願いします。

問い合わせ：熊本大学教育学部附属特別支援学校特別支援部
〒860-0862　熊本市黒髪5丁目17-1
TEL：（代表）096-342-2953（担当：高森）

熊本大学テレビ放送公開講座（1月24日スタート）

TKU（テレビ熊本）
土曜 16:55 ～ 17:25
（再）金曜 14:58 ～ 15:28

「発信！熊大力　考える体、行動する脳」

誰もが気軽に「お茶の間で熊本大学の授業を受ける」ことができるのがテレビ講座です。
バラエティー豊かな研究の最前線を分かりやすくお届けします。今回はアンチ・エイジングがテーマです。

①平成21年1月24日…… 老化は手から～あなたの脳は何歳ですか？～ ……（大学院自然科学研究科　村山伸樹教授）
②平成21年1月31日…… のばそう健康寿命～長生きは骨と関節から～ ……（大学院医学薬学研究部　水田博志教授）
③平成21年2月7日…… 認知症～老化だけではない脳の病～ ……（大学院医学薬学研究部　池田　学教授）
④平成21年2月14日…… 忍び寄る糖尿病～正しい知識と予防～ ……（大学院医学薬学研究部　荒木栄一教授）
⑤平成21年2月21日…… 健康寿命は体力作りから～スポーツの本当の素晴らしさを知るために～ ……（教育学部　中川保敬教授）

※番組タイトル・放送日は変更する場合もあります。

問い合わせ：熊本大学政策創造研究教育センター
TEL：096-342-2044　http://www.kumamoto-u.ac.jp

EVENT 掲示板

教育学部
第9回算数・数学サロン

教育学部の学生・教員"手作り"の算数・数学の教材や問題を使って、算数・数学の面白さを体験していただく、楽しいイベントです。

■開催日時：平成 21 年 3 月 7 日(土)　午後
■開催場所：熊本大学教育学部講義室(予定)
■参加対象者：小学生～高校生、教職員、一般
■事前申込：不要　■参加費：無料
■問い合わせ：教育学部数学教育講座　山本信也
TEL：096-342-2598 ／ FAX：096-342-2595

教育学部
美術科卒業・修了制作展、在科生展

学生たちの集大成ともいえる制作展です。出展作品は、絵画、彫塑、デザイン、木工芸で、二紀展や県美展など各コンクール入選受賞作品や発表論文も展示します。

■開催日時：平成 21 年 3 月 3 日(火)～8 日(日)
平日　午前 9 時 30 分～午後 6 時 30 分
土日　午前 9 時 30 分～午後 5 時 15 分
■開催場所：熊本県立美術館分館 4 階(入場無料)
■問い合わせ：教育学部美術科 松永研究室
TEL：096-342-2678

Let's リユース
回収にご協力ください。

リクラブ（熊大サークル）
For You 市

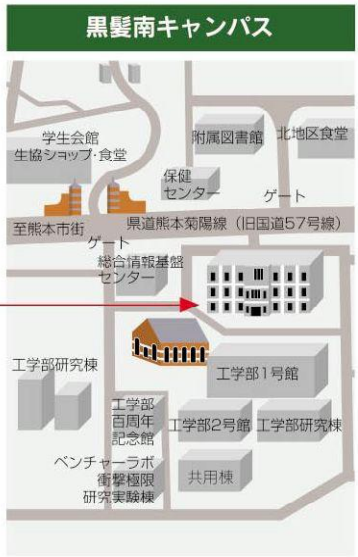
環境問題を考え行動するサークル「リクラブ」は、卒業生や地域住民から不要になった家具・家電製品を回収して、新入生や地域の方へ安く提供するイベントを毎年 3 月に開催しています。

■回収期間：平成 21 年 2 月 17 日～3 月 21 日
■回収方法：お持ち込みか出張回収。持ち込み場所は 3 月 12 日までは福利施設(学生会館南側)第 3 ミーティング室前。
3 月 13 日からは大教センター C 棟前
■開催日：平成 21 年 3 月 8 日、21 日、22 日　■開催場所：学生会館(黒髪北キャンパス)
■問い合わせ：リクラブ
E-mail:reclub21@yahoo.co.jp　http://reclub.hp.infoseek.co.jp

CAMPUS 歴史さんぽ

事務局本館

旧熊本高等工業学校本館として、大正 13（1924）年に竣工した建物です。文部省建築技師の長岡勇衛の設計によるもので、当時流行していた柱頭飾りなどが見受けられます。創立時の校舎消失後の再建校舎で、文部省直轄学校における鉄筋コンクリート造り校舎の初期のものとして知られています。平成10（1998）年9月、国の登録有形文化財に指定されています。



熊本大学基金へのご協力に感謝し、心より御礼申し上げます。

No.4（平成20年9月1日～平成20年11月30日）

卒業生、在学生の保護者、名誉教授の方々をはじめとした皆様から、平成20年11月30日現在で、総額約2億624万円（うち熊本大学振興会からの寄附約1億2,063万円を含む）のご寄附をいただきました。皆様のご協力に厚く御礼申し上げます。

今号では、平成20年9月1日から平成20年11月30日までの間にご入金を確認させていただきました個人390名、3法人・団体等のご寄附者すべての皆様へ感謝の意を込め、ここにご芳名を掲載させていただきます。公開をご希望されないご寄附者につきましては、掲載しておりません。

また、ご寄附者で万が一お名前がもれている場合につきましては、誠に恐縮ではございますが、募金推進室（電話：096-342-2029）までご連絡ください。

なお、第1期の募集目標金額は10億円となっております。皆様の一層のご支援とご協力を賜りたくお願い申し上げます。

1. お名前・寄附金額の掲載を希望されたご寄附者

［寄附金額別、五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。］　※（　）内の数字は、累積寄附金額（万円）です。

100万円	岡村　宏	髙見　勝己	春田　洋一				
30万円	大庭　英樹	佐藤　泰生	五髙済美柔道会九州支部(31.3)				
25万円	藤原　和人						
20万円	木村　重雄	滝沢　勇一	牧野　雄二	山下喜八郎	山田　仁穂		
15万円	北原　一太						
10万円	石見　敏行(40)	岡田　高明	神原　武	菊池　健(30)	中島　重旗	八塚南海夫	
5万円	青木　忠幸	芦田　大和	阿野　静也	池田　悠爾	甲斐　文朗	柏木　潤	木崎　剛明
	國武　敬司	黒木　輯	最相　元雄	佐々木　隆	猿渡　靖	園田　義宣	戸塚　誠司
	富永　雄吉	冨吉　勝美(10)	成松　澄夫	藤井　博昭	松田　猛夫	松永　邦久	向江　文雄
	吉田　道雄						
5万円未満	東　憲治	阿地部友幸	飯田　英雄	池田　尚	池田　直明	伊勢　眞	植木　典生
	上原　士郎	内野　吉志	大富　武昭	岡部　俊英	川原浩一郎	小村幸二郎	島内　保高
	清水　博和	下村　勉	鋤本　己信	高橋　啓介	髙群　正晴	武生　博文	武末　謙二
	田中　實夫	塘　正弘	中島　赳	永本　至	納富　勝彦	馬場　一	濱﨑　欣明
	林　和美	春田　益男	檜垣　雅男	牧野　秀宣	蓑田　眞幸	村木　祐二	村田　健郎
	村松　清作	森　誠	矢澤　岳	山本　博伸	吉原　邦夫		

2. お名前のみ掲載を希望されたご寄附者

［五十音順・敬称略にて掲載させていただきます。］　※［　］内の数字は、累積寄附回数（回目）です。

秋田　國幹	足立　大成	阿部　憲司	有馬　史材	飯田　信之	池上　雪男	石田心次郎	井手　秀逸
井上　元之	今井　博昭	今泉　直喜	今村　繁美	牛島　進	宇田　哲生	浦本　義鷹	江頭　侃
江口　吾朗	江島　健二	大久保秀隆	大田　政伸	岡崎　一正	緒方　安孝	緒方　雄輔	岡本　英明
小川　隆治	沖　宏治	小倉　繁	尾崎　一徳	乙葉　修	小野田敏行	尾畑　充男	甲斐　孝明
柿野　完治	角　浩一	角江　紘一	金川　祥一	鎌賀　公	川上　光信	川口　誠一	北里　謙祐
北村　大	木月　正善	木下　芳明	木村富久男	木村　裕一	清田　純次	清田　泰輔	草場　武司
工藤　智昭	國武　徳之	熊丸　浩仁	黒岩　英雄	小泉　寿昭	小出　義輝	神﨑　翔平	古閑　忠之
古賀　正明	古財　正孝	小崎　久光	児島　恭一	古瀬　元博	小松　静男	小松原佳子	齊藤　明宏
坂田　邦弘	坂本　優	坂本　芳文	佐川　道夫	佐土原　浩	塩田　主一	実藤　公一	志波　保則
紫垣健二郎	島野　洋助	島原　俊英	寿藤　久男	城　喜久雄	白井　忠義	白石　旭	末高樹巳人
末永　政彦	菅原　一雄	杉本　明	杉本　智	瀬戸口敬介	垰　茂	髙橋　浩一	髙橋　安行
髙山　隆志	竹下　哲司	田崎　敏生	田中　久夫	田中　良直	田中　良純	谷内　稔治	田渕　一誠
千歳　久	辻　正弘	土山　清子	角田　浩	坪井　健児	出口　大和	東矢　中允	戸田　英二
冨永　陽一	永井　勲	長尾　哲也	永田　達也	中西　亮二	中野　司朗	仲野　直路	中村　昭雄
中村　善雄	奈須　孝行	鍋島　悟	楢﨑　満生	鳴海　孝義	西口　昭一	西島　秀昭	西山　羊右
野口　雅章	野中　聖生	林田　直子	東　哲治	東　龍一	平岡　芳郎	平野　圭一	深田　文敏
福原　孝明	福本　稔	藤井　俊矣	藤本　康孝	古荘　昭憲	古本　重隆	豊東　正員	別府　寛二
星子晋一郎	本田　範正	前田　博	牧　剛司	増田　貫志	町田　和美	松浦　淳	松浦　文人
松江　靖夫	松木　重夫	松下　静祐	松平　嘉明	松間　隆根	御沓　幸吉	水町　秀樹	三宅　秀隆
三好　卓	向田　達宏	村井　淳男	森川　藤仁	森田　敦史	安田　和詔	山本　宏	由布　雅夫
横川　紀一	吉田　保	吉野　達雄	吉村　隆之	渡辺　祐治			
株式会社NIPPOコーポレーション			堤化学株式会社[2]				

3. お名前・寄附金額の掲載を希望されないご寄附者

個人145名

新聞で見る
熊本大学

著作権の都合によりWeb上では公開しておりません。

My book レビュー

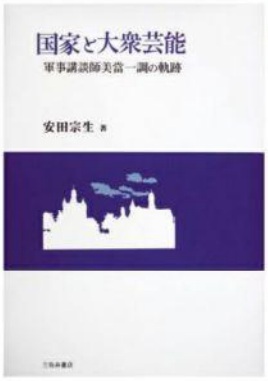
『覚醒剤の社会史 ドラッグ・ディスコース・統治技術』

文学部教授 **佐藤 哲彦**

覚醒剤は昔は薬局で売られていた薬でした。それがどのようにして問題とされるようになったのかを詳細に分析し、その過程が映し出している日本社会のあり方を論じたものです。

著者：佐藤哲彦
定価：5,600円(税別)
発行：東信堂

2007年度日本社会病理学会学術奨励賞、第7回日本犯罪社会学会奨励賞受賞



『国家と大衆芸能 ―軍事講談師美當一調の軌跡』

大学院社会文化科学研究科教授 **安田 宗生**

国家と芸能は一見無関係のように思われますが、実は両者が密接に関係していることを、熊本が生んだ講談師(芸名美當一調)の経歴を追いながら、軍部がいかに全国的に人気を集めた講談師を軍事教育に利用していったのかを明らかにしました。

編著者：安田宗生
定価：7,500円(税別)
発行：三弥井書店

附属図書館にも置いてあります。

未来へつなぐ
熊大の
“宝”

肥後村々雨乞行列彩色画

（五高記念館蔵）

恵みの雨を乞う庶民の祭り

お天とう様まかせの大地の恵み。
長雨も困るが、日照り続きも困る。

雨乞いの祭りには、
村ごとに仕立てた造り物を担ぎ、
旗や鳴り物を持った行列が
村々から城下町までねり廻って降雨を祈りました。
その様子を表した絵巻が、
この「肥後村々雨乞行列彩色画」です。
カラフルでユーモラスな表現の中に、
自然と寄り添い、自然と共に生きた人々の歩みが
生きいきと描かれています。

郷土史の研究資料として、
五高記念館に収蔵されています。

熊本大学は今年60周年を迎えます

昭和24(1949)年5月に熊本大学が発足して、今年で60周年を迎えます。本学では地域と共に歩んだ60年間を記録し、今後の発展に貢献する基礎資料を編纂・刊行するために写真や資料、情報等を収集しています。皆様のご協力をお願いします。

問い合わせ：熊本大学60年史編纂室　TEL：096-342-3951
http://hensan60.kuamoto-u.ac.jp

編集委員

田中尚人　大学院自然科学研究科
田村耕一　法学部
首藤　剛　大学院医学薬学研究部
西村兆司　広報戦略主幹

熊本大学広報誌
熊大通信
KUMADAI TSUSHIN

皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

2009年1月発行　編集・発行 / 熊本大学
〒860-8555　熊本市黒髪2丁目39番1号　TEL.096-342-3119　FAX.096-342-3007
sos-koho@jimu.kumamoto-u.ac.jp

熊本大学公式ホームページ
http://www.kumamoto-u.ac.jp